

トマス・アクイナスにおける「一」の研究(一)

—— unum の觀念について ——

(哲学教室) 岡崎 文明

Studium des Einen bei Thomas von Aquin (I)

—— ratio unius ——

(Seminar für Philosophie)

OKAZAKI, Fumiaki

梗概

序論

- 〔一〕 古代ギリシアにおける「一」
- 〔二〕 問題提起
- 〔三〕 transcendentia のふたつへの「一」

第一章 「一」の觀念

- 〔四〕 結論の先取り／＼「一」の概念規定の問題性
- 〔五〕 「一」の概念規定法
- 〔六〕 理由・根拠と分析命題
- 〔七〕 一と存在者の可置換性
- 〔八〕 名付けの三層構造からの解釈

第二章 一と存在者の可置換性

- 〔九〕 可置換性の根拠(一)——単純な存在者——
- 〔一〇〕 可置換性の根拠(二)——複合された存在者——

- 〔一一〕 可置換性の根拠付け方法の特徴
- 〔一二〕 可置換性の吟味(一)——実在的に同一、觀念的に異なる——
- 〔一三〕 可置換性の吟味(二)——可置換性は普遍的原理——
- 〔一四〕 可置換性の吟味(三)——善と存在者の可置換性の特徴——
- 〔一五〕 可置換性の吟味(四)——一と存在者の可置換性の特徴、或る問題性——

第三章 「形而上学的「一」と「数の始原」

- 〔一六〕 「形而上学的「一」と「数の始原」の区別
- 〔一七〕 ピュタゴラス、プラトンの考え
- 〔一八〕 これに対するトマスの態度
- 〔一九〕 アヴィセンナの考え
- 〔二〇〕 これに対するトマスの批判
- 〔二一〕 両「一」の区別

第四章 一と多の関係

- 〔二二〕 一と多は観点による

「三」一は多に優先する

結論

「四」結論と課題

註

使用テキスト

序論

「一」西洋哲学の歴史において、「一」(τὸ ἓν, unum) は特別の位置を占めている。これは古くは、ギリシアの初期の哲学者ピュタゴラス (Pythagoras, c. 530 BC) やクセノパネス (Xenophanes, c. 570-c. 475 BC) などにおいて既に現われている⁽¹⁾。そしてプラトン (Platon, BC 427-347) やアリストテレス (Aristoteles, BC 384-322) などの多くの天才達の思索を経て、やがて西洋形而上学⁽²⁾の中心的位置を占めるに到る。特に、プロティノス (Plotinos, AD 205-270) に始まる新プラトン主義 (Neuplatonismus) の中でその「哲学の第一原理」として明示的となる。ここではそれは「善」と結合されて、いわゆる「善一者」(τὸ ἀγαθὸν ἢ τὸ ἓν) となる⁽³⁾。

「二」トマス・アクィナス (Thomas Aquinas, c. 1225-1274) がこの伝統を受け継ぐ。これは主に、アリストテレスやまた彼を通してプラトンなどから、さらにディオニシウス (Dionysius, c. 500 AD) やイスラーム哲学圏に属する『原因論』(de causis) などの新プラトン主義文書から受容されている。しかしトマスにおいては若干の変容が見られる。

そこで右の基本的な見取り図を念頭において、今回の拙稿ではトマス・アクィナスにおける「一」の基本的な観念・概念を明らかにしたい。問題とするテキストの箇所は *summa theologiae*, I, q. 11, a. 1「一は存在者の上に何らかのものを付加するか」⁽⁴⁾である。

「三」トマスによれば、「一」は「存在者」(ens)、「ある」(res)、「何らかのもの」(aliquid)、「善」(bonum)、「真」(verum) 等⁽⁵⁾の *transcendentia* (超範疇的概念) の一⁽⁶⁾である。transcendentia とは存在者の全体を表示する観念・概念である。

これらの中でも「善」(bonum)や「真」(verum)の観念・概念には認識主体つまり「知性」(intellectus)との一致 (convenientia)・対等 (adequatio) が含意されている⁴⁾。これは「善」や「真」の概念の特徴であるが、しかしこの特徴は「一」の概念にはない。この点で「一」は「善」や「真」と異なる。

しかし古代の新プラトン主義では知性との一致という特徴はなく、「善」と「一」は万有の根源において対等に結合される⁵⁾。トマスはこの点で新プラトン主義とやや趣を異にする。

第一章 「一」の観念

〔四〕さて、「一」の観念・概念は何か。以下に「一」の観念・概念規定を考察することしよう。目下のテクストの主文 (corpus) では結論が先に述べられている。

「私は答えてこう言わなければならない。一は存在者の上へ何らかのものを付加するのではなく、ただ分割の否定を付加するに過ぎない。」⁶⁾ (傍点は筆者による。)

一般に何かを観念・概念規定する場合には、外延のより広い「類」(genus) 概念を「種差」(differentia) 概念で限定して、外延のより狭い内包のより豊かな「種」(species) 概念を構成する。これを称して「縮限する」(contrahere) という⁷⁾。

例えば「動物」という類概念を「理性的」という種差概念で限定・縮限して「人間」という種概念を構成する。こうして「人間は理性的動物である」という「人間」の概念規定が出来上がる。

この場合、「類」も「種差」も「種」もいずれも「存在者」である。類という存在者の上に、種差という存在者を加えて、種という

存在者を構成する(但し、ここである「存在者」は「実在的存在者」を意味している)。これが何かを定義する一般的方法である。

この方法では、類の外延はより広く、その一部分を縮限して、外延のより狭い種を構成することになる。

したがって、この場合には、種(人間)は類(動物)の一部分であるという大前提がある。つまり、規定されるものが存在者の一部分でなければ、右のような限定・縮限はできないのである。

〔五〕ところが、「一」は存在者の一部分ではなく、全体である。したがって「存在者」を縮限するという方法で「一」の観念・概念を規定することはできない。それでは一体どうすればよいのであろうか。

トマスは「一」は「存在者」の上に「何らかのもの」(res aliqua) を付加するのではない、そうではなくて「分割の否定」(negatio divisionis) を付加するに過ぎない⁸⁾と言っている。

ここでは、「もの」(res)と「否定」(negatio)が対比されている。「もの」とは「実在的な存在者」(ens reale)を意味している。これに対して「否定」とは実在的な存在者ではなく「観念」としての存在者、つまり「観念的な存在者」(ens rationis, ens secundum rationem)を意味している。(本稿では以下、ratioに「観念」の訳を当てる。)したがって、ここで対比されているのは「実在的な存在者」と「観念」となる。

右の結論命題は「一」が「存在者」の上に付加するのは、何か他の「実在的な存在者」つまり「もの」ではなくて、「分割の否定」の「観念」である⁹⁾ということを意味している。

〔六〕続いてトマスはこの結論命題に対する理由・根拠をあげている。曰く、

「なぜなら、一は〈不可分の存在者〉以外の何ものをも意味しないからである」⁸⁾と。(へへは筆者による。)

その理由・根拠は「一」とは元々「分割されない存在者」「不可分の存在者」という観念を持っているからであるという。

つまり、「一」の持つ元々の観念・意味を分析すれば、必然的に先取りされた結論命題⁶⁾が搾り出されてくる。この意味で、この結論命題は、いわば分析命題である。

またここから、この理由・根拠が、先取りされた結論命題の、三段論法による論証形式をとれないことも理解されるであろう⁹⁾。

「七」しかしながら、「分割の否定」の観念をその上に付加するところの基にある「存在者」は、まずひとつの「実在的な存在者」つまり「もの」である。次にこの「存在者」の

観念(ratio entis)の上に「分割の否定」の観念(ratio negationis divisionis)が付加される。こうして「一」の観念(ratio unius)ができ上がる。したがって「一」の観念も「存在者」の観念(ratio entis)も、同じ一つの「実在的な存在者・もの」の上に付加される。(下図参照)

ここからいわば自動的に「ものにおいて(in re/secundum rem)」「一」と「存在者」は同一で、したがって置き換えられ得ることが帰結する。それゆえトマスは続けてこう言っている。

「そしてここから明らかに、一は存在者

unum と ens の三層構造

| NOMEN | unum | | ens |
|-------|-------------------------------------|---|-------------|
| RATIO | ens indivi -dunn, ratio unius | ratio negationis divisionis ----- ratio entis | ratio entis |
| | RES | rns としての ens | |

と置き換えられる」¹⁰⁾と。

「八」トマスがアリストテレスから受けた認識論によれば、名付け(nominatio)には「名」(nomen)―「観念・意味」(ratio)―「もの」(res)の三層構造がある。

ここよりすれば、右の「一と存在者の置き換え(convertere)」は、「もの」の次元では可能となるが、「観念」の次元では不可能である。観念の次元では両者は異なっているからである。

すなわち、「存在者」は「存在を持つもの」という観念を表示するが、これに対して「一」は「不可分の存在者」(ens individuum)という観念を表示しているからである。両者の観念構造は異なっている。つまり、両者は同義語ではない。

換言すれば、「一」と「存在者」とは「もの」としては同一であるが、観念としては同一ではない、さらに「名」としても同一ではない、という構造になっている。

このように名付けの三層構造から、トマスの結論命題⁶⁾の意味が理解される。またここから、一と存在者の可置換性も、いっそう理解される。(上図参照)

第二章 一と存在者の可置換性

「九」トマスは、「もの」の次元における「一と存在者の可置換性」の理由・根拠を次に導入する。そのテキストはこうである。

「というのも、すべての存在者は単純であるか、それとも複合されたものであるか、であるからである。ところで、単純であるものは、現実的にも可能的にも、不可分である」¹¹⁾。

ここでは「存在者」の分析から出発して「可置換性」に到っている。論旨は次の如くである。

(1) すべての存在者は二種類に分けられる。ひとつは「単純な存在者」であり、いまひとつは「複合された存在者」である。

(2) ところで、「単純な存在者」は現実的にも可能的にも、つまり如何なる意味においても不可分である。単純なものは分解できないからである。分解できないものは存在する。つまり「存在者」である。

(3) また、「不可分なもの」はそのまま「一」である。言い換えれば、それは、自分の存在を保持しているように自分の一性を保持しているのである。

したがって、「存在者」は「一」であり「一」は「存在者」である。つまり両者はものの次元では置き換えられる。

〔一〇〕これに対して「複合された存在者」では多少事情が異なる。

「ところが、複合されたものは、その諸部分が分割されている間は存在を持たないが、複合されたものを構成し複合した後は存在を持つ。そしてそこから各々のものは、自分の存在を保持するように自分の一性を保持するのである。」¹²

(4) 複合された存在者は分解され得る。したがって、それは、分解されている間は、存在していない。

(5) だが、合成され終わった後では、それは存在する。この時点でそれは「存在者」となる。

(6) 各々のものは、自分の存在を保持しているように、また自分の一性をも保持している。したがって「存在者」は「一」(統一さ

れたもの)でなければ存在するとはいえない。

つまり、「存在者」は常に「一なるもの」として存在する。

(7) ゆえに「一と存在者は置き換えられる。」

このようにして「一と存在者の可置換性」が根拠付けられる。

〔一一〕右の方法は、存在者の存在論的構造を分析することによる。これは、しかし自明原理から出発するところのいわゆる三段論法の論証ではない。それは、transcendentaliaをめぐる問題はそもそもそのような普通の論証(三段論法)の対象でもなく、縮限の対象でもないという理由による。

〔一二〕さて、多少面倒であるが、ここで右を吟味しておこう。

「一と存在者の可置換性」は、名付けの三層構造における「もの」の次元でのみ成立する。

右の根拠付けは、存在者は単純なものであれ複合されたものである、それが存在する以上は全体として統一性を持ったところの「一つのもの」として存在する、つまり「存在するもの」と「一つであるもの」は、意味内容は違えど、ものとしては同じである、という考察による。

例をあげよう。金沢大学の学生は多数居るとしても、彼らが金沢大学生として存在する以上は、全員が金沢大学学則にしたがって統括されて一つのまとまりをなしている。もしその学則の外にある学生が居れば、彼は金沢大学生ではない。したがって、金沢大学生として「存在」している者と、金沢大学生として「一グループ」である者とは、人間(もの)としては同一である。

〔一三〕この可置換性はたんに「一」と「存在者」の間でのみ成立するわけではない。「もの」、「善」、「真」といったいわゆるすべて

の *transcendentia* 相互間でも成立する普遍的な原理である。

これは何れも存在者を「もの」の次元で存在論的に考察し、分析することによって引出される¹³⁾。したがって、この可置換性は、観念上ないし認識論上の原理ではなくて、實在構造に即した原理——この意味で實在的原理——であることになる。

「一四」しかしよく考察して見ると「一と存在者」と「善と存在者」とでは、可置換性が成立する場がやや異なっている。

「善」も「存在者」と *secundum rem* には同一であるが、*secundum rationem* には異なる。そして「善」は「欲求され得る」(*appetibile*) という観念を持つ。ところが、「善」は既述の如く知性との関連を含意している¹⁴⁾。つまり「善」は「真」と同様に、知性なしには有ることのできない特別の観念である。

したがって、善と存在者の可置換性が成立する場には常に知性が介入してくる。「真」との置換においても事情は同じである。

「一五」これに対して、一と存在者の可置換性の場には直接的には知性は介入してこない。一と存在者が成立するために知性は直接的には必要ないからである。

このように両可置換性では、それが成立する場が異なっていることが理解される。この異なりが如何なることを意味しているかは、トマスの「万有の根源」を古代新プラトン主義のそれと対比するときに、いっそう明らかになるであろう。これについては後日、稿を改めて言及したい。

第三章 「形而上学的」と「数の始原」

「一六」トマスにおける「一」の意味は差し当たって以上であると

して、そこから古代の哲学者の「一」の見解をみておこう。そうすることによってトマスにおける「一」の意味がいっそうよく理解できるからである。

トマスによれば、「一」には二つの種類がある。ひとつは、「形而上学的」(*unum metaphysicum*) である。これは右に見た如く「存在者と置き換えられる」である。いまひとつは、「数の始原——数の始め」としての「一」(*unum numerium*) である。これはいわゆる「単位」としての一である。

「一七」アリストテレス¹⁵⁾はこの両者を区別していたが、ピュタゴラスやプラトンは区別をしていなかった。またアヴィセンナも区別をしていなかった。しかし、ピュタゴラス、プラトンのギリシア哲学者達とアヴィセンナとは見方が異なっている¹⁶⁾。

右はアリストテレスを通したところのトマスの解釈である。以下これを見ておこう。

まず、ピュタゴラス、プラトンの考え方であるが、これはトマスと同様に、「存在者と置き換えられる」は、「存在者」の上に何らかの「もの」を付加するのではなく、「不可分の実体」——つまり、不可分という「観念」を付加された存在者——を意味していると¹⁷⁾。トマスからすれば、この考えはこの限りで正当である。

そして次に彼らは、この考えを数の上にも適用する。数の「一」も「不可分の実体」を表わしていて、他の数は「一」を単位としてこれから構成されるのであるから、すべての実体はかかる数から構成されている——万有の根源は数である——と信じたのである¹⁸⁾。

「一八」しかしトマスからすればここに混同が見られる。つまり、「数的」は「存在者と置き換えられる」と区別されなければならない。なぜなら、数は「量」の範疇に属する存在者であるが、

「存在者と置き換えられる」は範疇を越えた transcendentia であるからである。

例えば、「三」という存在者・もの」は「一」という存在者・ものに「二」という存在者・ものを付加することによって構成される。

このように数は存在者に「観念」ではなくて「もの・存在者」を付加することによって構成される。つまり、数的一は存在者の部分であり、「存在者の全体」、transcendentia ではない。「数の始原の一」(『数的一』)と「存在者と置き換えられる一」とを混同している点で、ピュタゴラスもプラトンも間違っていることになる。しかしトマスは「彼らの考えは誤っている」と明言していない。なぜであらうか。

それは、彼らの「数の始原の一」の理解は間違っているとしても、「存在者と置き換えられる一」の理解は正当であるからである。少なくとも半分は正しい理解に達しているからである。

「一九」これに対してアヴィセンナの理解はどうであらうか。彼は「数の始原である一」の理解から「存在者と置き換えられる一」の理解へ進む。

「数の始原である一」は存在者・ものの実体の上に何らかの「存在者・もの」を付加する。こうすることによって量としての数が出る¹⁹⁾。その例は前項「一八」において見た。

これを観察して彼は「存在者と置き換えられる一」にもこの考え方を適用する。すなわち「存在者と置き換えられる一」もまた存在者・ものの上に別の「存在者・もの」を付加するのだと信じたのである。例えば、「白」という存在者(質)が人間という存在者(実体)に付加されて「白人」が構成されるようにである²⁰⁾。

「二〇」しかしアヴィセンナのこの考え方に対して、トマスは明確

に「しかしこれは明らかに誤りである。」²¹⁾と述べて全面的に退ける。そのわけはこうである。

もし、すべての「一なるもの」は「自分以外の何らかの存在者・もの」が付加されることによって一となるのであれば、付加された「自分以外の何らかの存在者・もの」もまた「一なるもの」であるのだから、このものもまた更に別の「自分以外の何らかの存在者・もの」が付加されることによって「一なるもの」となっているはずである。

こうしてこの事態が無限に進行することになる。すると、初めの「一なるもの」は無限の多なる存在者・ものから成ることになり、それは最早、存在することができないことになる。

ゆえにこれは誤りである。したがって、最初の仮定「すべての一なるもの」は「自分以外の何らかの存在者・もの」が付加されることによって一となる」が誤っていることになる。

それゆえ、すべての「一なるもの」は最初から自らの実体によって「一」でなければならぬ。つまり、「或る存在者・もの」に「他の存在者・もの」を付加することによって、その「或る存在者・もの」が「一なるもの」となるのではない²²⁾。

右はアリストテレスのいわゆる「第三の人間の困難」の理論である²³⁾。トマスはこの解決をアリストテレスにしたがってなしている。

このようにしてトマスはアヴィセンナの考え方は根本から誤っていると全面的に退ける。

「二一」かくして、二つの立場にある見解が退けられて、「存在者と置き換えられる一」と「数の始原としての一」とが区別されるのである。トマスによれば、「数の始原としての一」は量の範疇に属する存在者である。「存在者と置き換えられる一」は範疇を超えた

transcendentiaである。

第四章 一と多の関係

「一二」では、一と多の関係は如何なるものであろうか。多は一と対立的な観念であるように思われる。既に見たように「一」は「不可分」の観念を持っていた。これに対立する「多」は「可分」の観念を持つ。

トマスは両者の関係をいくつかの観点から分析している。同じものが観点によって一にも多にも見られるからである。そこでその観点を列挙してみよう。

(1) 或る意味で (uno modo) 可分のもの (多) が、別の意味で (alio modo) 不可分 (一) である場合。例えば、数がそれである。数は一、二、三・・・と可分 (多) である。しかしこれは種 species としてみれば不可分 (一) である²³。

(2) 端的な意味では (simpliciter) 不可分 (一) であるが、或る観点では (secundum quid) 可分 (多) である場合である²⁴。

① ひとつは、ものの本質に属しているものにおいては不可分であるが、本質の外にあるものにおいては可分であるものである。例えば、基体において一であり、付帯性において多であるものである²⁵。

② またひとつには、現実的に不可分であり、可能的に可分であるものである。例えば、全体において一であり、部分において多であるものである²⁷。

(3) 或る観点では (secundum quid) 不可分 (一) であるが、端的な意味では (simpliciter) 可分 (多) である場合である²⁸。

① それは、本質的に可分 (多) であるが、観念的に (あるいは原理、原因において) 不可分 (一) であるものである。例

えば、数的に多であるが、種的 (原理的) に一であるものである²⁹。具体的には既述の「金沢大学生」の場合である「一二」。

このような観点から、同じ存在者を一と多に区別することができる。

「二三」しかし、一と多は、対立するとしても対等ではない。存在者は存在する限り一である以上、存在者は端的な意味で一で、或る意味で多である。なぜなら、多は一の下に含まれるのであれば存在者の下にも含まれず、したがって存在することすらできないからである³⁰。

最後にトマスは、ディオニシウス (Dionysius) の文権を傍証としてあげている。

「一を分有しない多は存在しない。しかし諸部分において多であるものも全体において一である。そして付帯的に多であるものも基体において一である。そして数的に多であるものも種的には一である。そして諸種において多であるものも類において一である。そして諸発出において多であるものも根源において一である。」³¹

結論

「二四」以上で、最初にあげた結論命題の意味が明らかになる。端的に言えば、「一」は「もの」の次元では「存在者」と同一であるが、「観念」の次元では異なる。「一」は「不可分」の観念を「存在者」の観念の上に付加して「不可分の存在者」の観念を構成している。

かかる存在様態は transcendencia の特徴である。したがって「一」(「形而上学的一」)は「数の始原としての一」と異なる。また、「一と多は対等の関係にあるのではない。多は一に從属している。(古代の新プラトン主義においても同様である。)

しかし右に見た「一」の観念が論じられた立場は「われわれに可能な認識」の立場である。トマスはこの観念を万有の根源に適用するのであるが、それは如何なる仕方によるのか、これを明らかにすることは今後の重要な課題である。

.....

註

- (1) Arioteles, *metaphysica*, 986a 15-26, 986b 18-28.
- (2) E. R. Dodds, *Proclus Elements of Theology*, prop. 13
- (3) Thomas Aquinas, *summa theologiae* (以下「神学大全」) 第一巻第二題第1, q. 11, a. 1, utrum unum addat aliquid supra ens.
- (4) Thomas Aquinas, *de veritate*, q. 1, a. 1, c.
- (5) Proclus, *elementatio theologica*, prop. 1-13.
- (6) I, q. 11, a. 1, c. Respondeo dicendum quod unum non addit supra ens rem aliquam, sed tantum negationem divisionis.
- (7) *ibid.*, Sed contra est quod dicit Dionysius, ult. cap. *de Div. Nom.*: *nihil est existentium non participans uno*: quod non esset, si unum adderet supra ens quod contraheret ipsum. Ergo unum non habet se ex additione ad ens. (以下「神学大全」第1, q. 11, a. 1, c. 参照)
- (8) *ibid.*, c. unum enim nihil aliud significat quam ens indivisum.
- (9) [四] [11] を参照。
- (10) *ibid.*, c. Et ex hoc ipso apparet quod unum convertitur cum ente.

(11) *ibid.*, c. Nam omne ens aut est simplex, aut compositum⁹⁾. Quod autem est simplex, est indivisum et actu et potentia.

(12) *ibid.*, Quod autem est compositum, non habet esse quandiu partes eius sunt divisae, sed postquam constituunt et component ipsum compositum. Unde manifestum est quod esse cuiuslibet rei consistit in indivisione. Et inde est quod unumquodque, sicut custodit suum esse, ita custodit suam unitatem.

(13) 註(4) 参照。

(14) [三] および註(4) 参照。

(15) アリストテレスの数論は *metaphysica*, I. 990a 18-32 及び 1083b 23-1085b 34 など。以下「メタフィジクス」の各学派の見解がアリストテレスの批評と共に紹介されている。

(16) I, q. 11, a. 1, ad. 1, Ad primum igitur dicendum quod quidam, putantes idem esse unum quod convertitur cum ente, et quod est principium numeri, divisi sunt in contrarias positiones.

(17) *ibid.*, Pythagoras enim et Plato, videntes quod unum quod convertitur cum ente, non addit aliquam rem supra ens, sed significat substantiam entis prout est indivisa, existimaverunt sic se habere de uno quod est principium numeri.

(18) *ibid.*, Et quia numerus componitur ex unitatibus, crediderunt quod numeri essent substantiae omnium rerum.

(19) *ibid.*, E contrario autem Avicenna, considerans quod unum quod est principium numeri, addit aliquam rem supra substantiam entis (alias numerus ex unitatibus compositus non esset species quantitatis).

(20) *ibid.*, E contrario autem Avicenna, credidit quod unum quod convertitur cum ente, addat rem aliquam supra substantiam entis, sicut album supra hominem.

(21) *ibid.*, Sed hoc manifeste falsum est.

(22) *ibid.*, quia quaelibet res est una per suam substantiam. Si enim per aliquid aliud esset una quaelibet res, cum illud iterum sit unum, si esset iterum unum per aliquid aliud, esset abire in infinitum. Unde

standum est in primo.

(32) *Artoteles, metaphysica*, 990b 17, 1039a 2, 1059b 8, etc.

(34) I, q. 11, a. 1, ad 2, Ad secundum dicendum quod nihil prohibet id quod est uno modo divisum, esse alio modo indivisum; sicut quod est divisum numero, est indivisum secundum speciem: et sic contingit aliquid esse uno modo unum, alio modo multa.

(35) *ibid.*, huiusmodi erit unum simpliciter, et multa secundum quid.

(36) *ibid.*, Sed tamen si sit indivisum simpliciter, vel quia est indivisum secundum id quod pertinet ad essentiam rei, licet sit divisum quantum ad ea quae sunt extra essentiam rei, sicut quod est unum subiecto et multa secundum accidentia;

(37) *ibid.*, vel quia est indivisum in actu, et divisum in potentia, sicut quod est unum toto et multa secundum partes: huiusmodi erit unum simpliciter, et multa secundum quid.

(38) *ibid.*, Si vero aliquid e converso sit indivisum secundum quid, et divisum simpliciter;

(39) *ibid.*, utpote quia est divisum secundum essentiam, et indivisum secundum rationem, vel secundum principium sive causam: erit multa simpliciter, et unum secundum quid; ut quae sunt multa numero et unum specie, vel unum principio.

(40) *ibid.*, quasi per unum simpliciter, et multa secundum quid. Nam et ipsa multitudo non continetur sub ente, nisi contineretur aliquo modo sub uno.

(41) *ibid.*, Dicit enim Dionysius, ult. cap. de Div. Nom., quod non est multitudo non participans uno: sed quae sunt multa partibus, sunt unum toto; et quae sunt multa accidentibus, sunt unum subiecto; et quae sunt multa numero, sunt unum specie; et quae sunt speciebz multa, sunt unum genere; et quae sunt multa processibus, sunt unum principio.

使用テキスト

Artoteles, metaphysica, (Oxford, 1957)

Thomas Aquinas, *summa theologiae*, (Roma, 1952-1962)

Thomas Aquinas, *de veritate*, (Roma, 1964)

E. R. Dodds, *Proclus Elements of Theology*, (Oxford, 1963)

.....

* 拙稿は平成七年度文部省科学研究費補助金総合研究（A）による研究結果の一部である。（平成八年四月一五日受理）